

まんだら通信

第219号 (通巻254号)

平成26年09月 西暦2014年 佛曆2580年 皇紀2674年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

日本のあしあと

昭和六年生まれで、比較文化史が専門の東大名誉教授の平岡祐弘先生ご夫妻が、こちらの国立大学に招かれて北京に着き、タクシーに乗った時のこと。

片言の中国語を気に入った運転手さんが「あんた達はい人だから、このまま中国に住みなさい。」といったのでビックリして「でも、母親が日本にいるから。」と断つたら「それなら母親も呼べばいい。」と言われて返事に困っ

たと、ご本に書いています。

中国と言え、チベットや東トルキスタンを乗っ取り、役人の賄賂が一方でない、人権無視で経済格差のひどい国で、毎日どこかで暴動が起き、上海などの成金が数千万円の外車を持ち回しているかと思えば、内陸の人は食うや食わずの暮らしをしている国で、今の共産党政権がいつまで持つかわからないと、私たちは知っています。

中国の共産党政権は、都合の悪いことは、国民には一切知らせない方針を貫いていますから、運転手さんが知らないのは仕方ないことですが、それを別にしても、生まれ育った国は誰にとっても良い国なのです。

ペリー提督が黒船に乗ってやってきて、日本が開国した百五十年前、タイ以外のアジアの殆どの国は、強力な白人国家によって植民地という領土になっていました。

おまけにロシアは満州に勢力を伸ばし、朝鮮半島まで手に入れようという勢いでした。

その頃の日本は人口三千万人。植民地などという不名誉な身の上にならないため、貿易をして国力をつけようにも、お茶と生糸の他に売れるものとしてない有り様でした。

時の政府は、外国の進んだ技術を取り入れて製糸工場や造船所、製鉄所などの基幹産業を育て、同時に公教育制度を全国に公布しました。外国に侮られないため

には強い軍隊も必要でした。

その成果は、開国五十年にもならぬ時に日清・日露の戦いに勝利して、見事にその強さを世界に証明しました。

日露戦争に勝った時は、有色人種の国々はみんな、自分たちが勝ったように飛び上がって喜んだということでした。中でも、いつもロシアに痛めつけられていた周りの国々、北欧やトルコなどは尚更で、日本への親善訪問の帰り、明治二三年九月夜半、紀伊半島串本町で遭難した軍艦エルトゥール号の乗組員を救助した縁で、日本に好感を持つていたこともあって、手放しの喜び方だったと言うことです。

またインドでは祝勝パレードが一週間も続き「私はその頃幼かったけれども、大人に交じって毎夜一緒に行進した。」と『東京裁判』で、戦犯に無罪判決をした日本の理解者、インドのラダビノード・パール判事は想い出を語っています。

その後、その時その時、これが一番正しい行き方という判断で、満州国を造り朝鮮や台湾を経営し、アメリカを始めとする連合国と戦い、マレー半島やインドネシア、フィリピンを植民地から解放し、インドについてもイギリスからの独立のきっかけを作りました。

日本は大東亜戦争に敗れましたが、戦後すぐにタイ国王はラジオを通じて国民に向けて「日本は敗れたはしたけれども、お陰でアジア諸国は独立できた。難産の末にアジアに独立をもたらした母親のような、日本への恩を我が国民は忘れてはならない。」と放送し、打ちひしがれているであろう日本の子供たちに、ゾウの『花子』を贈って励ましました。

あれから七〇年、「わが国は侵略者だ」といっている勢力が日本にいますが、外国でそれを言うているのは、腹に一物ある韓国と中国だけと言うことを忘れてはならないと、私は思うのです。

日本には、外国に売るような天然資源がありません。けれども人間も資源の一つと考えれば、世界に誇る優れた人的資源があります。それは相手への誠意、心の広さ、ことに当たつての潔さ、そして学ぶことが大好きという万国共通の美德です。

日本人の勉強好きは昨日今日の話ではなく千二百年前に、お大師さまが『綜藝種智院』という、庶民のための完全給費生の学校を作ったことでも明らかです。単に思いつきで作ったのではなく、それ以前から、勉強したい人たちが沢山いた、と考える方が自然ではないでしょうか。

幕末から明治にかけて来日した異人さんが、口を揃えて「着ているものを見ると裕福とは見えないが、これほど朗らかで人に優しく、物おじしない民族は見たことがない」と日本にほれ込んだということは、もつと誇りにして良いことだと思います。

今月号も、自慢話めいて気が引けるのですが、争いごとが堪えない世界を見ていると、日本人をもう少し見習つたらいいのにと、この頃です。

にっぽん人情小噺 落語家 三遊亭鳳豊 第一〇四話 土俵際

最近、大相撲が遠藤とか大砂嵐などという人氣力士のおかげで、久しぶりに人氣を取り戻しているそうですね。新大関も誕生したし、あとは日本人の横綱誕生を待つばかりかもしれない。

ところで、皆さんは、森下祐哉というお相撲さんをご存知でしょうか。いまから三年前の七月場所、森下は前頭筆頭まで登りつめました。入門からわずか四年目のことです。初日は日馬富士、二日目は白鵬と対戦、だが、まったく歯が立ちません。そして、三日目にその事件が起こったのです。森下の相手は二メートルを超す大男、当時の



大関琴歐洲。制限時間いっぱいとなって、立ち上がりました。琴歐洲は、その長い手で森下のまわしを引くと、ここぞとばかり一気に寄つてきました。森下は、半身になってその押しをこらえ、大男相手にまわしをつかんだ右手一本で、土俵際で起死回生の下手投げを打ちました。

普通の相手なら、左膝を外側に向け、相手の身体を腰に乗せる。それが右からの下手投げなのですが、身長、体重ともはるかに森下より勝る相手は、森下にその準備もさせないまま、百五十キロの体重を一気に森下の身体にかけたのです。

森下の膝が外側に向けられない。逆の内側に向いた。しかも、膝は伸びきつたまま。そのおかしな向きの左膝に、琴歐洲の重心がすべてかかったのだからたまらない。「ガキッ」という不気味な音とともに森下は土俵に崩れ落ちたのです。

強引な浴びせ倒しで、琴歐洲の勝ち。行司の軍配は、高らかに琴歐洲に上がりました。でも、森下は砂まみれになつたまま、立ち上がることができませんでした。観衆が騒然としたなか、車椅子に乗せられた森下は、顔面を苦痛に歪めながら、土俵を去っていききました。

森下は、支度部屋から救急車で病院に運ばれました。その時、担架の上で、森下は泣きました。涙が次々とあふれては顔を伝わっていききました。

(ああ、これで俺の人生は終わった……)
森下はこの時、まだ二十六歳の若さでしたが、この怪我で引退を覚悟したのでした。

故郷、高知で友だちと相撲をとって遊んだ子供時代、高校横綱になつた時、大喜びをした母の笑顔、そして新入幕の土俵入り。そんな思い出が走馬灯のように、救急車のなかで、脳裏に浮かんで消えていきました。

病院でレントゲンを撮り、骨折はしていないとはわかつたものの、大きな病院で精密検査を受けるべく、森下は休場をして、故郷の高知へ帰ることになりました。

故郷とは、錦を飾って帰るところで、決して

うちひしがれて戻る場所ではない。

(俺は南国土佐をあとにして、東京に羽ばたいていった。それも今日で終わり。しかも、傷ついて戻ってきた。ああ、俺は、もう、生きていく意味がない)

森下を乗せた飛行機は、彼の人生を象徴するかのごとく、高知空港に着陸すべく、高度をぐんぐん下げはじめたのでした。

内側側副韌帯損傷、前十字韌帯損傷、それに半月板損傷。

これが診断結果でした。森下は、医師に聞きました。「相撲は取れますか」。医師は言いました。「しっかりとリハビリをやれば、取れると思いますよ」。「取れるんですね、相撲を」。森下はもう一度、確認をしました。そして、叫んだのでした。「やった、俺はまだ終わっていない！」

しかし、現実には、そんな甘いものではありませんでした。

膝の手術を終えたものの、リハビリはまるで地獄の毎日でした。ダッシュ、ジャンプ、ランニングのほかに、森下はサッカーのボールを必死で追いかけてました。力士が走るだけでどれだけ苦しいか、想像しただけでもわかるということです。

苦痛に顔が歪むたび、「もう一度、俺は絶対、土俵に上がるんだ！」と強く自分に言い聞かせたそうです。そして「あと一回」、「もう一回」、「最後に一回」と自らの身体を苛めつくしたのでした。

しかも、本場所の休場が続いている間に、前頭筆頭だった番付は、みるみる下がり、幕内から十両に、十両から幕下に、そして、平成二十五年春場所の番付は、西三段目八十四枚目まで落ちてしまつたのです。思えば、森下にとつての三段目は、平成十九年秋場所、入門してわずか三場所です。全勝優勝し、たつたひと場所です。通過した位置でした。その六年前に戻つたということですね。もう一度、振り出しからやり直し。

さらに、相撲界が厳しいのは、十両以上の関取でないなら、ちゃんこ番はもちろん、関取の

付人もしなければならぬし、風呂で後輩の背中を流さなければいけないのです。もちろん、森下はその役も甘んじてこなしました。

そして、ついに、森下は土俵に再び帰つてきたのです。再起の土俵の最初は、三枚目が相手。元幕内筆頭まで行つた力士がこんなところで負けるわけがありません。立ち合い、飛び込んでくる相手ががっちり受け止めると、右からの上手投げ一発で土俵に這わせたかと思つと、相手が突いてくれば、一歩も下がることなく胸を貸し、逆にのど輪で土俵下に叩き落しました。

三段目で全勝優勝、幕下でも全勝優勝をし、ついに十両に。先場所は、十両八枚目で十一勝四敗。あの事件から三年。奮闘努力の末に、森下はあと少しで、幕内が見えるところまでカムバックしてきました。長く、つらかつた三年間。たかが三年、されど三年。

人間、決して諦めてはいけませんね。彼は艱難辛苦を乗り越え、いまにも押し出されようになつた人生の土俵際から見事に中央まで押し戻してきました。膝の手術の跡は、勲章です。人生の敢闘賞かもしれませぬ。でもまだ、志半ば。

森下祐哉、四股名は土佐豊。時津風部屋。どうか皆さん、苦しいことがあつたら、テレビ機で、彼の土俵での必死でひたむきな生き様を見てあげてください。そして、もう一度、土俵際から歯を食いしばって立ち上がってください。「こんなことで、諦めてたまるか！」と。

MOKU出版と著者の三遊亭鳳豊師匠のご好意で、今月も転載させて頂きました。日本人は根性がなくなつた、といわれるこの頃ですが、久しぶりに胸がすく思いをすると同時に、熱いものが込み上げてきました。相撲中継を観る時は、『土佐豊』のしこ名に気をつけようと思ひました。気が早いのですが、日本人の横綱誕生も夢ではなくなりました。



台湾は親日国で有名ですが、それでも日本と蒋介石の支配について「犬が去って豚が来た」という言葉があるそうです。こちらが善意でも民族が違えば別の見方があるということですね。▼ヒガンバナ【ヒガンバナ科ヒガンバナ属】です。仏典に由む曼珠沙華をはじめ、千以上の別名があるというほど、親しまれた野草です。シナ大陸からの帰化植物だそうで、日本中のヒガンバナの遺伝子はすべて等しく、一つの球根から殖えたと考えられるとか。田畑や墓地など人里だけに生えていますね。有毒ですが、大量の水で毒を晒せば球根の澱粉が食料になる救荒植物だそうです。2014.9.9 龍渉

の菩提樹の前でお参りする人たち。着ている衣装がそれぞれのお国柄を表しています。インド巡礼の仏教徒が必ずお参りする四大佛蹟、ご誕生のルンビニ、初めて法を説いた(初転法輪)サールナート、ご入滅のクシナガルと並ぶ聖地です。柵の中にブッダが座禅した『金剛宝座』があります。▼1ページの記事は日本から見た歴史です。支配された側には、違う見方があることを忘れてはならないと思います。朝鮮は中華思想の国といひます。この考えで日本を見ると、日本は文明の遅れた野蛮国だそうです。野蛮人に支配された屈辱感が根づきにあるということです。

▼毎日、暑い暑いとぼやいていましたが、さすがに9月。あの暑さはもう来ないでしょう。お元気にお過ごしのことと思います。私はいえお陰様で過ぎた5日、お釈迦さまご入滅の80歳を迎え感無量です。▼今月24日は、午後1時半から恒例のお施餓鬼です。とかくご無沙汰になりがちなご先祖様へのお便りのお塔婆(3,000円以上)は、地元の皆様には、世話人さんが申込書の配付・取りまとめを致しますが、遠くの方は電話でご一報下されば、代わりにお墓にお供えに参ります。23日、前日なら間に合います。折から秋のお彼岸、お気軽にどうぞ。▼1ページ上の写真は、去年11月孫弟子の龍祐と行ったインド、ブッダガヤ

余滴